

第2章 概念枠組みと調査対象・調査方法

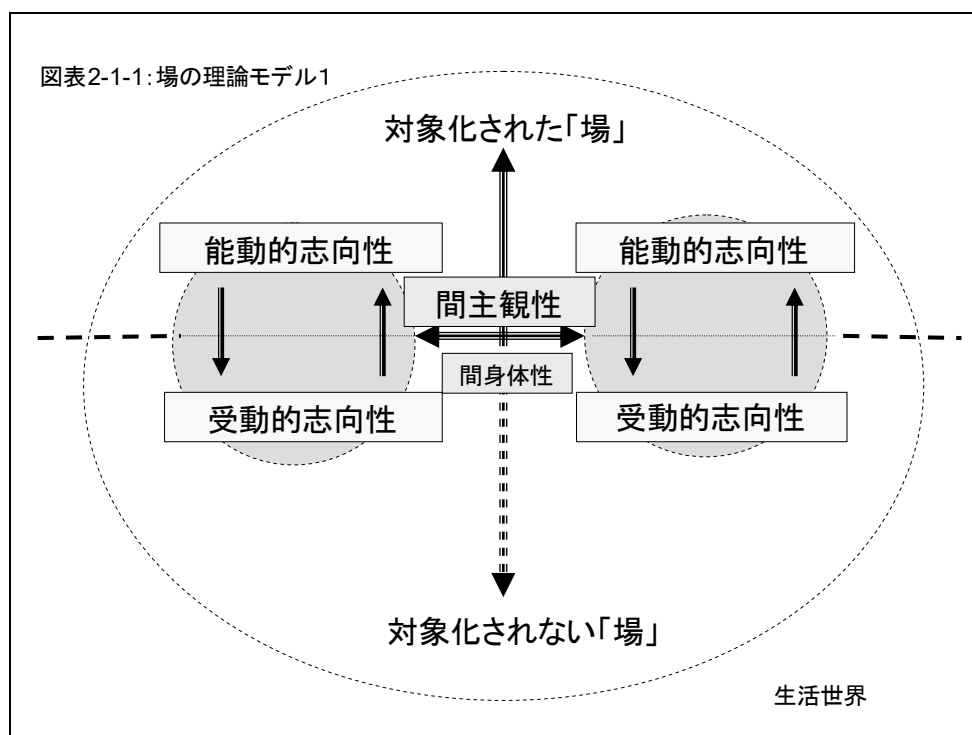
本章では、第1章で検討した理論研究の結果を用いて「場」理論モデルを概念枠組みとして提示する。さらに、本研究の調査対象、調査方法、調査事例の分析方法について述べる。

第1節 場の理論モデル

第1章では、「場」の基本的な性質を、空間性、時間性、身体性、二重性、自己組織性、関係性、意味性、根源性という八つの要素に集約した。

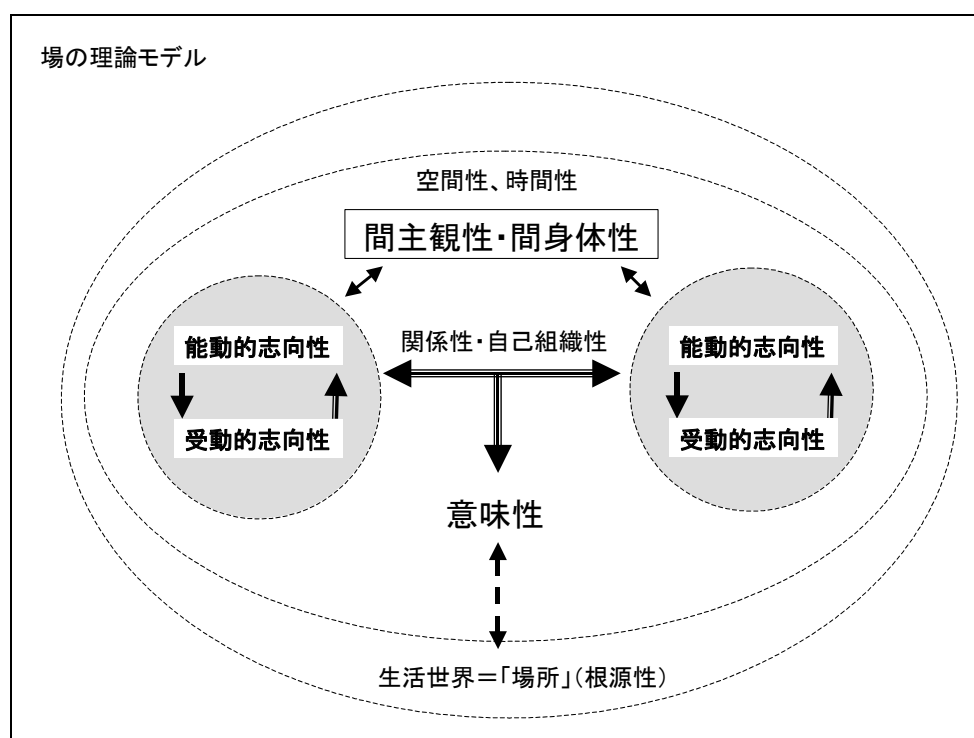
図表2-1-1、図表2-1-2は、本論文で採用したアプローチの方法である現象学を土台としながら先の八つの要素を用いて作成した「場」の理論モデルである。「場」の理論モデルは、企業における「場」のモデルを構築するための基礎となるモデルである。

1.1 「場」の理論モデル



「場」の理論モデル1は、人間の能動的志向性の間主観性によって「場」が対象化された「場」として認識されると同時に、人間の受動的志向性の間身体性によって「場」が対象化されない「場」として無意識に感覚されていることを表している。対象化された

「場」とは、具体的には、我々がデザインしたり、加工したり、また間主観的に共有できる時空間である。対象化されない「場」とは、「生き生きした現在」感覚を伴う自己を切り離すことのできない身体的な時空間である。知識の観点でいえば、対象化された「場」は形式知であり、対象化されない「場」は暗黙知である。このように、「場」が二重に構成されるのは、「場」が自己の二重性（身体の二重性）に基づけられているからである。しかし、われわれの日常においては、対象化された「場」と対象化されない「場」がまとまりをもったひとつの「場」として与えられており、区別して捉えられることはないと考えられる。それは、人間において能動的志向性（能動的綜合）と受動的志向性（受動的綜合）が常に不可分なものとして相互作用しているためである。また、われわれが「生き生きとした現在」において感知している「場」（点線で囲んだ部分）は常に変化していくが、それは根源的には「於いてある場」としての生活世界に根ざしている。



「場」の理論モデル2は、第1章で考察した「場」の性質を説明したものである。本研究で注目した、空間性、時間性、身体性、二重性、自己組織性、関係性、意味性、根源性という性質は、「場」を本質において、更に三つのカテゴリーに分けられると考える。

(1) 身体性・空間性・時間性・二重性

第一のカテゴリーは身体性である。身体性のカテゴリーには、空間性、時間性、二重性といった性質が含まれる。場の本質は、その時空間性にある。しかし、その時空間性の根拠は人間の存在のあり方にある。人間は世界内存在である。世界は人間によってつくられ、人間はその世界において存在する。時空間性とは、現象学的分析で明らかになったように、キネステーゼ（運動感覚）によって自己に与えられ間主観的・間身体的に形成される。つまり、この時空間性を成立させている基盤は、キネステーゼ（運動感覚）という身体性である。先に述べたように、自己が能動的綜合の領域と受動的綜合の領域から成っており、それが身体の二重性として表出されていることが、「場」の二重性の根拠になっている。

(2) 関係性・自己組織性

第二のカテゴリーは関係性である。関係性のカテゴリーには、自己組織性の性質が含まれる。場の本質は、その関係性にある。関係性とは、人間と人間、人間と物、物と物、の相互作用・相互行為のことである。相互作用・相互行為とは基本的には（能動的・受動的）志向性の働きに基づいている。また、関係性は、時空間性に依存しているので、時空間の二重性に対応して、対象化された関係性＝能動的志向性の領域、対象化されない関係性＝事発的志向性の領域の二重の関係性が成立していると考えられる。このような観点からすれば、関係性そのものが場であるとも考えられる。そして「場」における関係性の生成原理が自己組織性である。生命システムを前提とした「場」においては、自己組織性的に関係が形成される。自己組織性における、要素間の円環的因果のプロセスをあらわす「自己回帰（自己言及）メカニズム」や「ゆらぎを通じた秩序形成」といった特徴によって、「場」の生成や変化を理解しやすくなると考えられる。相互作用・相互行為という関係性によって生み出されるのは意味である。

(3) 根源性・意味性

第三のカテゴリーは根源性である。根源性のカテゴリーには意味性の性質が含まれる。場の本質は、その根源性である。場は人間の存在基盤であり、すべての人間の意識と経験の構造に組み込まれているからである。「場」の意味性は、「場」の根源性につながっている。その「場」がどのような「場」であるのか、「場」の意味を決めるのが「場」の根源性だからである。根源性を「場」の本質と捉えたのは西田であった。西田における「場所」とは一切の作用や存在を自己の内において存立させ、またそれらを自己自身のうちに映してみるものであった。「絶対無の場所」とは、禅の修行による悟り境地のような、真の意味での意識（自覚）の立ち現れであった。このように、西田の「場所」とは根源的な「場」のことであると考えられる。

現象学的な解釈をすれば、根源性とは、あらゆる活動の基盤となる生活世界であり世界地平にあると考えられる。そして、その根源性に基づいて、時空間を「場」として認識させているのが「場」の意味性である。先にあげたように、関係性は常に変動するも

のである。その関係性を全体としてコヒーレントな状態にするのが「場」の意味であり、「場」の意味によってその中からどういう行為が表出してくるかが決まる。目的が明確な集団がある一定の秩序（関係性）を形成するためには、拘束条件としての意味性が必要になる。関係性から生み出されるのが「場」であると同時に、「場」から関係性が生み出されるということである。「場」の根源性と意味性が整合的であることにおいて「場」は成立していると考えられる。「場」の根源性と意味性が整合的であるかどうかはわかるのは、われわれがもともと受動的綜合の領域において「場」的身体を生きているからである。

西田が指摘したのは、「場」の意味性を成立させる根拠となる「場」であった。このような、「場」の意味性を成立させるような根源的な「場」のことを、本研究では西田の場所論にならって（西田的）「場所」とよぶことにする。

1.2 Husserl・Buberの自他関係の概念と「場」の関係

「場」の理論モデルに関連して、本研究の概念枠組みとして、自己と他者の関係と「場」の概念¹について補足的に記述しておく。

図表 2-1-3 に提示したように、Husserl の現象学を自他関係という観点から分類すると、受動的綜合の領域、能動的綜合の領域、人格相互の交わりの領域の三つに分けることができる。この三つの領域における自他の関係は、それぞれ自他未分（乳幼児期の自己と他者が癒着した状態）、自他分離、自他の統合となる。これを Buber の自他関係に当てはめてみると、受動的綜合の領域は（自他未分）は幼児期の我—汝関係、能動的綜合の領域（自他分離）は我—それ関係、人格相互の交わりの領域は我—汝関係に対応すると考える。また、この三分類を「場」にあてはめれば、自他未分の関係が対象化されない「場」、自他分離の関係が対象化された「場」、自他の統合の関係が「場」を成立させる根源的な「場」、すなわち（西田的）「場所」のことであると考えられる。

ここで、Buber の概念を検討するのは、Buber によれば、この我—汝関係が実現するときこそ、人間は本当の他の人、すなわち汝に出会い、それと同時に本当の自分が実現されるからである。我—汝関係とは、具体的な身体をそなえた人間同士が、各自の本来の自分を見いだす出会いである。人は汝(Thou)に向かうことによって、その人の集一性の実現し、自分の全体をかけた集中が可能になる。第 1 章でも指摘したが、Buber の我—汝関係という考え方は、東洋哲学でいう「心身一如」や西田哲学における「自他未分の純粹経験」（絶対無の場所に於ける自己）に関係がある。さらに、Buber の我—汝関係は、宗教的な神秘体験だけではなく、芸術活動、日常的なゲームや遊びや仕事においても立ち現れるという。

¹ この自他概念と「場」の関係については、山口(2002)のフッサール現象学の三層構造 (p.14) に依拠している。

図表2-1-3: Husserl・Buberと「場」の関係

Husserl	Buber	「場」
受動的綜合の領域 (自他未分)	(幼児期の) 我一人関係	対象化されない場 (自他未分の場) (意識の野)
能動的綜合の領域 (心身分離・自他分離)	我一人関係	対象化された場 (有の場所)
人格相互の交わりの領域 (自他の統合、心身一如)	我一人関係	場を成立させる場＝ 根源的な場＝「場所」 (絶対無の場所)

われわれの日常生活は、対象化されない「場」を伴った対象化された「場」において成り立っていると考えられるが、真に創造的な活動においては、その「場」を成り立たせる根源的な「場所」と一体になることがある。逆にいえば、そのような自他の統合の「場」において、人間はもっとも創造的になり本来の自分を見いだすことができると考えられる。「我一人関係」という自他関係は、場の機能を理解する上で重要な指標になると考えられる。

第2節 調査対象

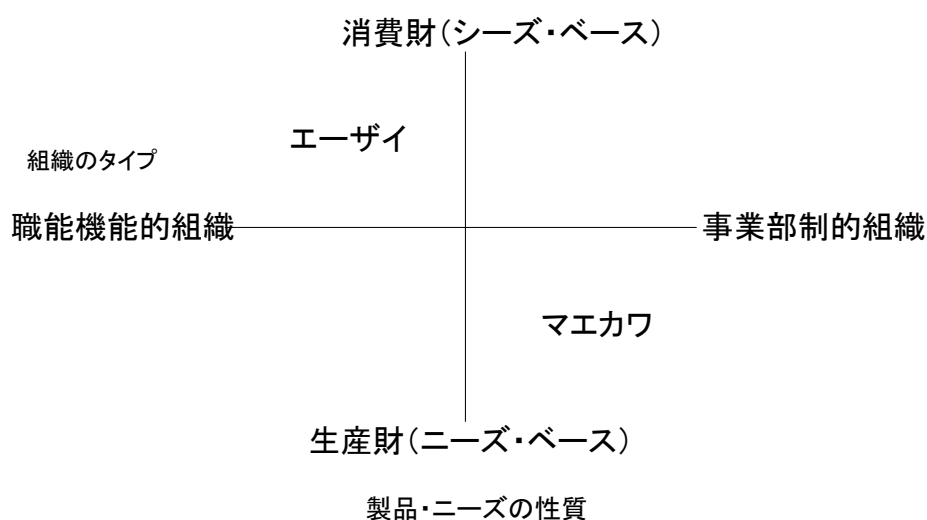
本研究の調査の対象企業は、エーザイ株式会社（以下、エーザイ）と株式会社前川製作所（以下、マエカワ）である。（図表 2-2-1：エーザイとマエカワの事業と組織の比較）この2社は、組織の構造と開発のタイプが全く違っている。したがって、組織構造及び開発のタイプの違いによって、それぞれの企業における「場」の性質も異なっている可能性がある。

まず、開発のタイプから考えると、エーザイは、シーズ・ベースの開発が中心の企業であり、マエカワはニーズ・ベースの開発が中心の企業であるといえる。また、製品の性質からいうと、エーザイは大量生産型の消費財²を生産しており、マエカワは受注生産型の資本財を生産している。組織構造のタイプで分けると、エーザイは機能分業によ

² エーザイの主な製品である医療用医薬品は不特定多数の人間が手にする可能性があるという意味では一般の消費財と同じであるが、薬事法によって価格が設定されており、またメーカーの直販が限定されている特殊な商品である。

るヒエラルキー構造をもった組織であり、マエカワは、「独法」と呼ばれる小集団からなるネットワーク構造をもった組織である³。規模としては、社員数でエーザイの方がマエカワより約3倍大きい。それぞれの企業の概要については、次章以下で詳しく説明する。

図表2-2-1：エーザイとマエカワの事業と組織の比較



インタビュー調査は、一対一の対面で行うことを原則とした。1名に対する平均インタビュー時間は約120分であった。形式は、最初にインタビューーの入社から今までの社歴をお聞きした後、質問票に関して質疑応答を行った。全体を通してフリーディスカッションの形で進めた。全てのインタビュー調査は、協力者の同意の下でMDに録音された。顧客企業ならびに外部団体に対するインタビュー調査に際しては、実際に当該組織に出向き直接インタビューを行った。なお、職場インタビューの結果をまとめた

³ 通常、組織構造は、職能別組織（機能別組織）、事業部制組織、マトリックス組織の三つ大別されることが多い。職能別組織（機能別組織）とは、トップマネジメントの意思がミドルを経てボトムに伝達されるタテの命令系統が直線的にひかれた組織形態で、指揮命令系統、責任、権限が明快、職能別に専門化しているため熟練の形成と活用が可能、低コストといった長所があるが、上方向への情報のフローがうまくいかない、トップマネジメントが過剰負担になるといった欠点がある。一方、事業部制組織は、製品別、地域別、顧客別に関連機能をたばねた独立性、自律性の高い事業部を単位とした組織形態で、事業分野ごとに機動的展開が可能であると同時にトップマネジャーが全社戦略に専念できる。また、各事業部でまとまりのある経営をさせられるので、経営者の育成に向いているなどの長所があるが、縦割りで部分最適の弊害が出やすい、組織が複雑でコストがかさむといった短所もある。マトリックス組織は、職能別組織と事業部制組織の両方を結合させたハイブリッド組織である。実際の組織は、純粋に職能別組織や事業部制組織である場合は少なく、多かれ少なかれ両方の要素をもっている場合が多い

ものは巻末に参考資料として添付する。

2.1 エーザイ

2.1.1 職場インタビューの対象組織ならびに対象者

エーザイにおける職場インタビューは、研究開発部門であるエーザイ筑波探索研究所の創薬技術研究所のサブリーダー10名と、医療用医薬品の営業部門である東京医薬8部のMR（Medical representative：医薬品情報担当者）10名の計20名に対して行った。期間は2002年の5月から7月までであった。

2.1.2 アリセプト・プロジェクト・インタビューの対象者

アリセプト関連のインタビューは、開発関係者ならびに営業関係者を対象に行った。開発関係者は11名、営業関係者は東京医薬8部のMR10名をふくめて15名である。さらに、エーザイの外部の意見として呆け老人をかかえる家族の会（3名）にもインタビューを行った。期間は2002年4月から9月までで、同じ方に複数回インタビューする場合もあった。

2.1.3 その他

その他、エーザイの組織や業務内容、技術開発の概要などを知るために追加でインタビューを行った。インタビューの所属は、知創部と研開人事室の計3名である。期間は、2002年4月から8月である。

インタビュー調査の日時、対象者に関する詳細は添付資料を参照されたい。

2.2 マエカワ

2.2.1 職場インタビューの対象組織と対象者

マエカワにおける職場インタビューは、研究開発部門である技術研究所のシステムコンポグループのリーダーを含めメンバー10名と、販売部門である飲料システムのリーダーを含めたメンバー10名の計20名に対して行った。期間は2002年の5月から10月までであった。

2.2.2 パン工場改善プロジェクトの対象者

パン工場改善プロジェクトのインタビューは、マエカワ側のプロジェクトリーダーを中心に3名を対して行った。特に、プロジェクトリーダーには計8回のインタビューを行った。顧客企業であるタカキベーカリーでは、担当役員（専務）をはじめ4名に対して行った。また、ご好意により工場見学もさせて頂き、実際の生産ラインの稼動状態を知ることができた。期間は1999年～2002年10月にかけてである。同じ方に複数回インタビューする場合もあった。

(榊原,2002 p130-142)。

2.2.3 その他

その他、マエカワの組織や業務内容、技術開発の概要などを知るためにインタビューを行った。インタビューの所属は、低温食品研究所、技術研究所、販のセンター、業務グループの計4名である。期間は、1999年から2002年6月にかけてである。インタビュー調査の日時、対象者に関する詳細は添付資料を参照されたい。

第3章 調査方法

本研究では、2つの切り口からインタビューを行った。一つは、企業における「場」の基本的な性質を考察するための職場インタビューであり、もう一つは、「場」の動態にアプローチするためのプロジェクトを中心にしたインタビューである。それぞれの概要について次に説明する。

3.1 職場インタビューの方法

企業における「場」の基本的な性質を考察するための職場インタビューは、事前の質問票に基づく個人インタビューという形式で行った。質問票については、巻末のインタビュー・フォームを参照されたい。

3.1.1 質問票

「場」に関する事前アンケートは、インタビューの職場に対するイメージの背景にあるコンテクストを探るために行った。「場」についてインタビューするときに、「あなたの職場はどんな場ですか」とか「場について説明してください」というような質問は意味をなさない。われわれが明らかにしたいのは、インタビューが「場」という「概念」をどのように理解しているかではなく、インタビューが日常的に仕事を行っている「場」そのものだからである。ただし、理論的背景の「場」の理論モデルにおいて提示したように、「場」には対象化された側面と対象化されない側面という二重性があるので、その全てを言語で表現することは困難であるから、まず事前に用意した質問票によって「イメージ」としての「場」を表現してもらい、「なぜそのような表現が職場にあてはまるのか」を聞くという方法をとった。同時に、職場において一般的であると考えられるいくつかの「場」、および「場」における行為に関連した設問をつけ加え、それらについても「なぜそのような回答をしたのか」を質問した。

問1の職場（の雰囲気）に関する設問では、次に挙げた60個の言葉から、あてはまるものを10個、あてはまらないものを10個選んでもらった。この60個の言葉は、職場の表現として適切だと思われる言葉を筆者が任意に選んだものである。これらの単語は特別な脈絡なく並べており、インタビューには、直感的に選ぶように事前をお願いした。先に述べたように、単語自体はインタビューの指標として使用するものであるか

ら、どんな言葉でも構わないのだが、あまり特定の傾向に偏らないように配慮し、ポジティブな表現（40 個）、ネガティブな表現（40 個）、ニュートラル（どちらともとれる）表現（20 個）を選んだ。重複する表現が入っているのは、言葉を選択する際の整合性を確認するためである。たとえば、「安心できる」、「うち解けた」、「居心地のよい」など関連があると思われる表現が、あてはまるものとして同時に選択されていれば、インタビューの場の認識に一貫性があると判断できる。また、「協力的な」と「孤立した」や、「自由な」と「管理された」という表現が、あてはまるものとして一緒に選ばれていた場合、なぜこの 2 つを同時に選んだのかを突っ込んで質問することによって、一見矛盾しているようにみえる二つの単語が同時に選ばれた背景（コンテキスト）をある程度明らかにすることができる。

常識的に考えて、多く人によって選ばれている単語ほど、あてはまる、あてはまらないに関わらず、なんらかの「職場」の共通認識の指標になっていると考えられる。

設問1		
ポジティブな表現	ネガティブな表現	ニュートラルな表現
活発な	孤立した	厳しい
見通しがいい	腰が重い	マニュアル化された
安心できる	息苦しい	ビジネスライクな
頼れる	不安定な	家族的な
協力的な	孤独な	忙しい
余裕がある	余裕がない	行動的な
居心地のよい	堅苦しい	対話の多い
自由な	落ち着かない	独立した
明るい	暗い	変化の早い
のびのびした	窮屈な	理念的な
計画的な	繰り返しの多い	異質な
テンポのよい	停滞している	同質的な
面白い	つまらない	
無駄がない	無駄が多い	20%
うち解けた	よそよそしい	
洗練された	管理された	
効率的な	せっかちな	
迅速な	めりはりのない	
夢のある	いい加減な	
ビジョンのある	単調な	
情熱的な	要求が多い	
まじめな	めまぐるしい	
わかりやすい	わかりにくい	
本質的な	表現しにくい	
40%	40%	

設問 2 では、「場」についての観点から質問した。まず、

1. 議論がしやすいように机や棚など備品の配置に気を配っている
質問 1 は、オフィス空間（物理的な配置）としての場について聞いている。
2. お互いの思いや信念を本音でぶつけあう機会がある
4. 「何が本当の目的なのか」、「なぜこの業務行うのか」について原点に返って議論する機会がある
7. 顧客の立場にたって思考・行動する場がある
9. わからないことや問題解決のためのヒントを誰にでも聞ける風土がある
の 4 つは、なんらかの行為に関わる「場がある」と認識されているかどうかをたずねている。
3. 問題がおこつたらもっぱらその問題がおこつた現場で解決する
質問 3 は、場における意志決定について聞いている。
5. 状況の変化にあわせて組織の編成替えが頻繁に行われている
10. 部門間の壁はひくく、コミュニケーションが活発に行われている
質問 5 と質問 6 は、組織構造と場の関係について聞いている。
6. 新しい課題解決のためには迅速にチームを組んで対応する
8. 部門横断的なプロジェクト形式で仕事をする機会が多い
質問 6 と 8 は、職場における「場」づくりが行われているかどうかを聞いている。

設問 1 と同様に、設問 2 もこれらの質問項目を指標にして、インタビューでさらに突っ込んだ問いかけをしていくことを目的にしている。選ばれた単語や設問の回答に対するインタビューの説明を総合的に解釈していくことで、より「場」に接近できると考えられる。なお、質問項目については、知識創造サーベイ（野中郁次郎監修「日々の業務の取り組み方についての調査」2001 年度改訂版）から抜粋した。

3.1.2 インタビューの方法

インタビューは二段階で行った。最初に、インタビューイの入社経緯から現在に至るまでの経歴を説明してもらった。

次に、質問票の設問に沿ってなぜそれを選んだかについて質問した。ただし、インタビューの流れによって、直接質問票とは関係のない派生的な事柄についても聞いている。これは、職場全体のイメージやコンテキストを把握するために重要だと考えた。インタ

ビュー内容については、第5章でインタビューイの「語り口」をなるべく変えないようにしながら項目ごとに整理した。

第4節 調査事例の分析と解釈の方法

本研究は現象学的なアプローチを用いて、企業の「場」の現実⁴に迫ろうという試みである⁵。企業における「場」という漠然とした「(対象化されない部分を含む)対象」を、個々のインタビューイの「場」に対する認識に依拠して解釈するということである。そこで解釈されるのは、個々のインタビューイの「語り」である。それぞれのインタビューイは、自ら直接経験している「場」を自らの視点から口述する。質問票で選ばれた「言葉」や、その選ばれた言葉の意図する内容、個人の立場で表現される具体的な職場の像は、分節化する言語化可能な範囲ではあるとはいえ、それぞれが経験している生活世界の断片を表現していると考えられる。さらに、それらが語られる前提となる個々の文脈(生活世界の諸相)も、インタビューイの「語り」の中から部分的に浮かびあがる。

4.1 ライフヒストリー研究法

このような口述を解釈するという考え方は、ライフヒストリー研究法にもみられる。ライフヒストリー研究法は、主に人類学や社会学の分野において確立されてきた研究方法である。ライフヒストリーとは、「インタビューという相互作用をとおして生み出された口述の自伝的語り」(中野,1995)であり、ライフヒストリー研究法とは、個人のパースペクティブ、すなわち価値観、状況規定、社会的知識、体験を通して獲得したルールなどにアクセスする方法である。インタビューイにとって、職場は日常生活の場でもあるから、経歴を語ることは、個人を語る「自伝的語り」である。そして、自己は自分自身について語ることを通して逆に生み出されていく。このことは、Berger and Luckman(1966)の social constructionism(社会構成主義)および広義の構築主義⁶の基

⁴ 木村(1994)は、現実を「reality」と「actuality」に分けて考察している。語源であるラテン語では、realityとは、「もの、事物」を意味する res に由来するのに対し、actualityとは、「行為、行動」を意味する actio に由来する。すなわち、reality が現実を構成する事物の存在に関してこれを認識し確認する立場から言われるのに対して、actuality は現実に向かって働きかける行為のはたらきそのものに関して使われる。木村は離人症の症状を例に出して、離人症では、知覚的には外界の事物の物理的存在が認知されなくなるのではなく、世界に対する好意的な関与の遂行感を失った結果、現実感が希薄になるとしている。木村のいう actuality とは、現象学において、われわれの感覚に直接与えられる「生き生きした現在」のことであると考えられる。木村の解釈からは、場の二重性、特に「生き生きした現在」としての場が我々に現実感を与えていることを示唆している。

⁵ 企業を対象にしているわけではないが、現象学的アプローチを具体的な事例に適用した例としては、精神病理学における木村敏(1985,1994,1997)の解釈や、発達心理学における鯨岡(1999)の解釈などがある。

⁶ 構築主義に関しては、上野編著(2001)を参照されたい。

本的な考え方の前提にある(1)現実社会的に構成される、(2)現実言語によって構成される、(3)言語は物語によって組織化される、すなわち「世界が言語で表現されているというよりも言語が世界を構成している」ということを意味する(野口、2001) 7。

4.2 現象学的な分析と解釈の方法

ライフヒストリー研究法では、語られた個人の歴史の分析を対象としているが、これは集団のライフヒストリーにも応用可能であると考えられる。つまり、本研究による一連のインタビューは、集団のライフヒストリーに関する記録でもある。インタビューにとって自己(個人の社歴や考え方)について語ることは、「自己の於ける場」、すなわち無自覚の共有化された価値観や社会的知識、体験を通して獲得したルール(身体知)などにも言及することでもある。同時に、「場」について語ることはそのような「場に於ける自己」を語ることである。つまり、私的なことを語っている部分にも社会的な規定力が刻み込まれており、どのような規定力が刻み込まれているかを明かにすることで、逆に「職場」が浮き彫りになると考える。自己の社歴や企業活動への参加などについて語ることを通して描写された「場」は、能動的志向性の働きによって切り取られてきた場である。しかし、理論モデルにおいて指摘したように、能動的志向性は常に受動的(事発的)志向性をともなっている。伴っているというよりも、受動的(事発的)志向性の方が先行しているといつてよいだろう。能動的志向性が働いていなくても、受動的(事発的)志向性は常に働いているからである。したがって、能動的志向性に導かれて表出してきた「場」から、その背後に働いている受動的志向性の働きを類推することは可能である。つまり、必ずしも客観的・外在的に存在する「場」だけではなく、間主観的・間身体的に構成され共有化された「場」を解釈することは可能であると考えられる。それぞれのインタビューの「語り」を重ね合わせることで、間主観的・間身体的に構成された「場」がより鮮明に浮かびあがると考えられる。

4.3 現象学的な分析と解釈の手順

Keen は、現象学的方法を用いる際の要点を次のように記している。

ある行動の断片を理解するには、まず、その行動をその人間が直接知覚する場(place)というコンテクストの中で見る。その場についての経験が統合している地平(意味連関)をみることによってその場が分析可能になる。次に、その場(place)をその人間の世界と其中で自分の位置づけをどう解釈しているかをみる。その人間の独自

7 自己の物語研究は、自己というイメージのまとまりや整合性は、自然・必然的に生まれてくるものではなく、一定の視点から行為や体験を取捨選択し、かつそれらを一定の筋にそって配列していくことによって始めて生み出されるということを経験し、同時に、自己物語はいつでも「語り得ないもの」を前提にし、かつそれを隠蔽していることを指摘している(浅野,2001)。

性ということにおいてその人間を理解することが可能になる。さらに、この理解の過程はわれわれがすでに暗黙のうちに理解していることの明確化であるということを経験すること。これら隠れた地平を明示的な焦点の下に引き出すことができるような概念をもてれば、それは他者の言動を理解することに役立つ(Keen,1975,p.52-108)。

現象学における直接的に経験される「事象そのものへ」立ち返るための方法としては、次のような手順が提示されている。

第一段階は、本質直観である。本質直観とは、時と場所によってかわることのない普遍的な物事の本質を観てとることである。たとえば、三角形とはどういうものを本質直観するという事は、三角形の定義を知ることではなく、いろいろな大きさや形のさまざまな三角形を実際に見たり触ったり空想することを通して、三角形の像があるひとつのまとまりとして見えてくることを意味する。このようにして、いったん三角形が本質直観されると、それはありとあらゆる三角形にあてはまる一般的な性質になるのである。本研究では、日常生活のどのような場面で「場」について感じたり語ったりしているかを検討することで、「場」に普遍的な性質について考察した。

第二段階は判断停止である。判断停止(エポケー)とは、日常生活をそのまま生きる自分の生き方、感じ方、見方、聴き方、知覚の仕方、判断の仕方を現象学的反省にもたらすことである。日常生活で行っているような、一連の意識活動を他の意識活動につなげて見ることをいったん止めて、それを振り返って考えることを意味する。具体的には、インタビューに際して、われわれが日常的に使用している場という言葉に対する先入見にとらわれずに、あらためて企業における日常的な場に関して質問した。また、場に関係すると思われるような事柄については「なぜそう思うのか」という問いかけを行った。

第三段階は現象学的還元である。現象学的還元とはより根源的な領域や要因に引き戻して関連づけることであり、意識の明証性に立ち戻るとのことである。特に、能動的志向性(能動的綜合)と受動的志向性(受動的綜合)の観点から解釈を行うようにした。

全体を通して、「場」に関する具体的事例における言説や行為を分析する際に、「場」の基本的な性質や「場」の成り立ちに立ち返って分析と解釈を行うことに努めた。